

TMR 施設事例 1

錦江ファーム TMR センター（事例：焼酎粕を活用した TMR）

肉牛には、子牛生産を目的に飼育している雌牛（繁殖牛）、繁殖牛から生まれる子牛（育成牛）、肉用として出荷するために太らせる牛（肥育牛）がいます。黒毛和種など、肉用種に区分される牛の半分近くは九州地域で飼育されていることから、九州は日本の重要な肉牛飼養地域になっています。肉牛の飼料は、育成牛や肥育牛の場合、輸入した穀物や牧乾草（ぼくかんそう）が中心です。しかし、最近は値段が高くなり、経営を圧迫しています。また、繁殖牛の場合、自分の畑で作る牧草類（自給粗飼料）を主に食べさせていましたが、生産者の高齢化や飼育頭数が増えたことで自給粗飼料を作るのが大変になってきました。

そこで、このような畜産農家に安価で手間のかからない国産飼料を収集して安価な肉牛用飼料を供給するため錦江ファーム TMR センター（鹿児島県南さつま市）が設立されました。ここでは、繁殖牛用 TMR、育成牛用 TMR、肥育前期用 TMR、肥育後期用 TMR を生

産しています。

錦江ファーム TMR センターの特徴は、飼料用米やイネ WCS などの自給飼料の他、食品製造副産物として焼酎粕濃縮液を活用しているところです。焼酎粕濃縮液は焼酎の製造時に出る廃液（焼酎粕）の液体部分をあつめて濃縮したものです。焼酎業界では焼酎粕の処理が問題になっていましたが、濃縮することで飼料として使いやすくなりました。九州沖縄農研では焼酎粕濃縮液の成分、あるいは、焼酎粕の TMR を牛に食べさせたときの影響などを調べ、焼酎粕が牛の飼料として低コストで有効に使えることを明らかにしてきました。

錦江ファーム TMR センターでは耕種農家、農業や食品に関連する企業、そして行政機関とも連携した取り組みを行い、TMR の生産量を増やし、今後も地域に安価な国産飼料を供給していくことを目指していくそうです。

【畜産草地研究領域 神谷 充】



錦江ファーム TMR センター



TMR 作製作業



TMR のロールペール



給与した TMR を食べている肉牛